

植民地／帝国の「世界史の哲学」

米谷 匡史

一、はじめに

京都学派がつむぎだした「世界史の哲学」言説は、「日本哲学」として囲いこまれるべきものではない。それは、戦時期東アジアの拮抗しあう多声的な言説空間のなかで、とりわけ、植民地朝鮮／帝国日本の狭間で、とらえかえすべきものである。

太平洋戦争期に脚光をあびる「世界史の哲学」・「近代の超克」論は、「西洋」／「東洋」の二項図式のもとで、「西洋近代」の没落、「日本」・「東洋」の台頭、そして多元的世界の形成を唱える言説としてとらえられがちである。し

かし、これらの議論の起源は日中戦争期にあり、抵抗する中国との抗争関係のなかでとらえかえす必要がある。

西田幾多郎『日本文化の問題』（一九三八年講演、一九四〇年刊）、田辺元『歴史的現実』（一九三九年講演、一九四〇年刊）、三木清・船山信一らの「東亜協同体」論（一九三八年秋）、高山岩男「世界史の理念」（初出一九四〇年）は、いずれも日中戦争期の言説である。そこでは、「西洋近代」だけでなく、アジアに侵略する「日本近代」の超克こそが問題の焦点であった。

そして、だからこそ、同時代の朝鮮でも、これらの言説への批判的な応答が試みられていた。日中戦争期の左派知識人たち（印貞植、金明植、徐寅植、朴致祐）は、植民地／

帝国主義の抗争をのりこえる契機を「東亜協同体」論に見いだし、戦時社会変革をつうじた朝鮮社会の自立・発展、そこにはらまれる矛盾・葛藤を論じていた。とりわけ、哲学者の徐寅植や朴致祐は、京都学派の「世界史の哲学」、「近代の超克」論を批判的に受容し、独自の文脈で議論を展開している。それは、日本の議論を受容した「親日」言説と言うべきものではなく、抵抗／協力がせめぎあう葛藤にみちた試みである。そして、「世界史の哲学」が東アジアにおいてもつ意味を、その臨界点において批判的に問いかえずものとなっている。

これらのテキストを参照しながら、植民地朝鮮／帝国日本が交錯する言説の場のなかで「世界史の哲学」を再検討し、植民地主義をめぐる葛藤に照明をあてることを試みる。

二、「世界性的の世界」——新たな普遍性と植民地主義

一九二〇年代の京都学派の哲学は、ハイデガールの「世界内存在」論や、西田幾多郎の「場所」の論理、そしてマルクス主義・ヘーゲル弁証法のインパクトをうけながら、歴史的・社会的存在論として展開していった（三木・田辺）。そして一九三〇年代には、京都学派の言説空間において、「世界」がキー・ワードとしてせりあがっていく。西田は

「弁証法的な一般者としての世界」（一九三四年）によって後期西田哲学を確立していき、田辺元は「種の論理と世界図式」（一九三五年）によって「種の論理」を体系化していった。

ただし、危機の時代、転換期の時局と切りむすびながら「世界史の哲学」が語られはじめるのは、日中戦争の衝撃による。日中戦争が長期化し、日本の侵略と中国の抵抗が対峙・交錯するなかで、植民地／帝国主義の抗争をのりこえる理念として「東亜協同体」論が語られはじめる。そこで重要な役割をはたしたのは京都学派左派の三木清や船山信一であったが、その問題圏の一環として、「世界史の哲学」を語りはじめたのは三木清であった。

三木は、「現代日本に於ける世界史の意義」（『改造』一九三八年六月号、全集一四）において、「現代の日本が直面してゐる問題は世界史的な観点からのみその意味を完全に理解し得るものである」「日本の行動にとつて要求されてゐるのは世界史の哲学でなければならぬ」と言う。そして、解決すべき課題として「資本主義の問題の解決」と「東洋の統一」を掲げている。そこでは、日本資本主義の変革により、帝国主義による植民地化とは異なる東アジアの新たな秩序を形成することが目指されている。

このように日本資本主義・帝国主義の批判に重点をおく

三木清・松山信一ら左派の議論と、その後太平洋戦争期にかけて「大東亜共栄圏」を正当化していった高山岩男・高坂正顕ら右派の議論とは、帝国主義にたいする構えにおいて大きく異なるものがある。

しかし、左派・右派の対立をこえて、両者の間にはある共通した論理が見られる。京都学派の言う「世界史的立場」とは、他者性を否定し帝国主義的な自己拡張をおこなう独善的なナショナリズム・一国史観を批判し、民族・国家をこえた世界性・普遍性において歴史をとらえなおすものである。この「世界史的立場」は、左派・右派に共通するものであり、右派の議論においても日本の独善的なナショナリズム・帝国主義は否定されている。

このような京都学派の論理を集約するものが、西田幾多郎の言う「世界性の世界」の構想である。それは、ヨーロッパ中心の帝国主義的な世界を否定するとともに、日本帝国主義が自己を中心として世界を形成しようとする動きをも否定し、多元的・多中心的な世界の形成を唱えるものである。そこでは、植民地化され、主体を否認されてきた「東洋」が主体を回復し、世界の各地域が互いに他者を否定することなく、脱中心的に多元的・多中心的な世界を形成していく。そのような「世界」のあり方は、いたるところが中心となるような「無限大の円」として描かれる。

このような世界像は、「東洋」を植民地化し、他者性を否定して自己を拡張してきた「西洋近代」の普遍性をのりこえようとするものである。他者／自己が相互限定する「世界性の世界」の自覚によって、「西洋近代」の普遍性をのりこえる新たな普遍性を創出し、帝国主義的な近代世界の克服を探求するものと言える。この意味で、京都学派の「世界史の哲学」は、字義通りには、帝国主義を批判する言説であると言えるだろう。

しかし、こうして帝国主義を批判し、新たな普遍性を探求する試みをつうじて、新たな植民地主義が産出される契機をも、批判的に検討する必要があるだろう。

「世界性の世界」を自覚した国家、すなわち日本こそが、多元的・多中心的な世界を形成する主導者となりうる、というのが京都学派の主張であった。他者を否定し、自己を拡充する普遍性ではなく、他者／自己の相互限定の媒介者としての高次の普遍性、すなわち「無的普遍」を京都学派は主張する。しかし、この高次の「無的普遍」にこそ、それを自覚することを通じて自己を高め、それによって他者を包摂していくような、新たな植民地主義がはらまれていく。それは、既存の帝国主義を批判する形をとりながら、日本の勢力圏を再定義し、正当化していく植民地主義なのである。

そして、このような植民地主義は、西田・田辺や高山・高坂ら右派の言説だけでなく、三木や船山のような左派の言説にもはまられている。むしろ、帝国主義批判を前景化する左派の言説にこそ、その危うさは鮮明に現れるのではないか。ここでは、植民地朝鮮／帝国日本の狭間で「世界史の哲学」言説を吟味することによって、この問題に照明を当てることを試みたい。

三、三木清の「世界史の哲学」

ここでは、帝国日本の左派知識人である三木清の「世界史の哲学」を検討したい。ここでは、いかなる普遍性が探求されているのだろうか。

日中戦争期の三木は、日本の侵略と中国の抵抗が対峙・交錯するなかで、その抗争をのりこえる普遍的な理念として「東亜協同体」論を提示していく。講演「政治と文化」(一九三八年一月、全集一四)では、次のように言う。「偏狭な独善的な日本主義をも超克して世界的に進歩的意義を有する新しい日本文化が作られねばならず、支那文化の独自性をも認めつつこれを包み得るやうな普遍的意義を有するより高い文化が作られねばなりません」。

ここで三木は、「東亜協同体の新文化」を、「偏狭な独善

的な日本主義」をのりこえる「普遍的」なものとして提示しているが、その普遍性は、抵抗する中国の独自性を認めつつ、それを「包み得る」ものとして意味づけられている。また、「日支を結ぶ思想」(『知性』一九三八年一月号、全集一四)では、「民族主義を超克し得るやうな思想」として「東亜協同体の理念」を提示しているが、それは「新しい世界主義の要求を含むもの」であり、「東亜協同体は世界的な連繋において考へられねばならぬ」とも言われる。

このように、日中戦争におけるナシヨナリズムの抗争は、それを克服する普遍性・世界性を創出していく契機としてとらえられている。抵抗する中国との抗争は、「偏狭な独善的な日本主義」の克服にむけて普遍性・世界性を触発する。

ただし、この普遍性・世界性は、日本・中国双方のナシヨナリズムをこえたものであり、日本にも中国にも属さず、いわば両者の「間」に兆すものでしかないはずである。日・中の抗争をつうじて、それぞれの自己否定が触発され、それらが連鎖しながら帝国主義を変革していく契機にこそ、普遍性・世界性が垣間見られる。しかし三木は、その普遍性・世界性を、日本によって領有していくことを欲望してしまう。三木によれば、「近代資本主義の問題」を解決し、「東亜協同体」の形成を主導していくことによって、日本

はその普遍性・世界性を身にまとい、「偏狭な独善的な日本主義」をのりこえた新たな日本へと再生することができると。そして、その普遍性・世界性を掌握することによって、日本は中国を「包み」、指導することができる。

ここで三木は、日・中の抗争によってその「間」にめばえる普遍性・世界性を、日本が領有していくことを欲望し、それによって中国を「包み得る」ような立場へと自らを置いていく。抵抗する他者＝中国の衝撃をうけて、日本を普遍性・世界性へと開きつつ、その普遍性・世界性を我有化することによって他者を包摂しようとする力が、ここには作動している。それは、「東亜協同体」形成に参与することによって中国が自立・発展しうること呼びかけ、抗日ナショナリズムを対日協力へと誘導しようとする言説となっている。帝国主義批判を試みつつ、このように新たな普遍性によって他者を主体化し導こうとする無意識の欲望にこそ、新たな植民地主義が背後から忍び寄っていると見えるだろう。

三木の「東亜協同体」論は、直接には、抵抗する中国との関係のなかで呼びかけられたものであり、朝鮮・台湾をめぐる議論は展開されていない。しかし、「東亜協同体論の再検討」（『新国策』一九四〇年五月二十五日、全集未収）には、次のような言及が見られる。「日本の民族主義がドイツに

於けるが如き全体主義的民族主義ではない事は申す迄もない。朝鮮、台湾民族を包容する我国としては排他的ならざる民族協同の方式こそ必要である」。「東亜協同体」論は、「全体主義的民族主義」をのりこえる普遍性をもつものとして提示されるが、その「民族協同の方式」において日本は朝鮮・台湾を「包容」する立場を保つことになる。

三木の「東亜協同体」論・「世界史の哲学」は、日本帝国主義による中国・朝鮮・台湾への侵略・支配を批判するものである。しかし、植民地／帝国主義の抗争をのりこえる「東亜協同体」の形成を主導する日本は、普遍性・世界性の力によって中国を「包み」、朝鮮・台湾を「包容」するものと想定されている。それによって、抵抗する他者のナショナリズムを対日協力へと導こうとしているのだ。ここには、日・中の抗争の狭間に兆した普遍性・世界性を手がかりとして帝国主義批判を試みつつ、その普遍性・世界性を領有し他者を導こうとする無意識の欲望において、新たに植民地主義が作動しはじめる契機を見ることができようだろう。

四、徐寅植の「世界史の哲学」

以上のように、「東亜協同体」論・「世界史の哲学」は、

帝国主義の克服にむかう普遍性・世界性の魅力を持つと同時に、そこには新たな植民地主義が兆していく危うさが存在した。そして、同時代の植民地朝鮮の左派哲学者徐寅植・朴致祐は、このような両義的な状況に敏感に反応しつつ、批判的な言説を展開していく。

日中戦争期の朝鮮では、日本帝国主義の勢力圏の拡大と戦時動員の強化のもとで、独立の展望が見失われようとしており、「内鮮一体」・皇民化政策によって民族抹殺の危機に直面していた。そのようななか、一九三八年秋頃から日本の論壇で唱えられはじめた「東亜協同体」論は、追いつめられたギリギリの状況において、戦時変革をつうじて植民地／帝国主義の抗争をのりこえ、朝鮮社会の自立・発展を模索する手がかりとして注目された。

『三千里』一九三九年一月号では、小特集「東亜協同体論と朝鮮」がくまれ、印貞植・金明植・車載貞（オヤジシノブ）が寄稿している。ここでは、「東亜協同体」論が掲げる戦時社会変革による資本主義・帝国主義批判が注目され、朝鮮社会が植民地状況から脱却し、社会発展を実現していく契機となりうると思われる。また、自主・協同の論理にもとづく「東亜協同体」の民族政策は、同化政策・皇民化政策を批判するものとして受容された。朝鮮の民族性を否定し、徹底的に日本化しようとする「徹底一体論」を批判しつつ、

朝鮮民族の自立性を保持したうえで日本と連携していく「協和的内鮮一体論」が提示されたのである。

このような印貞植や金明植の議論は、日本資本主義・帝国主義を批判しながら、戦時社会変革をつうじて朝鮮社会の自立・発展を模索するものである。しかし、このような試みは、帝国日本が戦時動員をつうじて導入する合理性・規律権力のなかに参与しつつ主体形成をおこなうものであり、「近代」の克服をめざしながら「近代」の暴力を反復してしまいかねない危ういものでもあった。

そして、このような危うい状況に、あえて批判的に介入していったのが、左派哲学者の徐寅植・朴致祐であった。徐寅植の論考「文化における全体と個人」(『人文評論』一九三九年一〇月号)、そして、朴致祐の論考「東亜協同体論の一省察」(『人文評論』一九四〇年七月号)は、こうした戦時期朝鮮の言説状況において、「世界史の哲学」・「近代の超克」論を批判的に受容・展開するものであった。ここでは特に、徐寅植の論考をとりあげながら、植民地／帝国の狭間でいかに「世界史の哲学」が論じられていたのかを検討しよう。

※ 『三千里』一九三九年一月号の印貞植・金明植・車載貞の論考、そして上記『人文評論』誌上の徐寅植・朴致祐の論考は、「植民地／近代の超克」研究会の共同作業によって翻訳・紹介をおこなった(『日中戦争期・朝鮮知識人の東亜協同体論』、戸邊秀

明解題、崔真碩訳）。以下の引用は、この翻訳資料からおこなっている。朝鮮知識人の「東亜協同体」言説をめぐる詳細な検討については、戸邊秀明氏の解題、そして洪宗郁氏、崔真碩氏、趙寛子氏の論考を参照されたい。

徐寅植は、論考「文化における全体と個人」において、全体主義を批判する理念として「東亜協同体」論を検討している。全体主義は、個人の自由と他民族の自立性を抑圧し、「文化の世界性・普遍性」を阻害してしまう。これにたいし、諸民族の自立・協同をめざす「東亜協同体」論は、全体主義を克服しながら、世界性・普遍性をもつ文化を創出するものととらえられている。

「人々は、現代日本の政治的課題と連結して日本の文化的使命を、日本固有の文化を枢軸として東西文化を総合した新しい世界性文化を創造するところに置く。ところで、今日の日本が世界性の文化を創造するだけ文化的に成熟できているかはいかなければ別個の問題として、仮にそれが可能であれば、それはまさに今まで風土と伝統に制約されて一種の島国的根性を脱却できなかった日本文化が新たな世界性・普遍性に到達することを意味するのである」

ここで徐寅植は、留保をつけながらも、あえて「東亜協

同体」論に「世界性・普遍性」の契機を見出している。それは、「内鮮一体」政策によって朝鮮の民族性を抹殺しつつある日本ファシズム・全体主義への批判の手がかりを、あえて日本の言説のなかに探る試みであったと思われる。

そして徐は、近代の個人主義と現代の全体主義の双方を止揚し、「全体と個性をともに生かす」ような「媒介的全体性」の理念を論じる。さらにこの全体性は、京都学派の哲学术語「世界性の世界」をも流用しながら論じられていく。それは、「多が多としての特殊性を維持しながらそのままただちに一となることのできる一種の無的普遍の性格をもつ世界」であり、「無限大の円のように到る所が中心となる」ような世界である。ここでは、「世界の多中心」が許容され、「中心と周辺があるために支配と帰属の関係を形成するようなことはあり得ない」。

さらに徐は、「今日我々が生きているこの市民社会の世界構造」、すなわち、近代の資本主義・帝国主義がうみだした抑圧的な世界構造を超越する課題に照らして、「世界性の世界」の内実を問いかえしていく。近代の世界構造において、「中心と周辺」が生まれ、「支配と帰属」の関係が形成され、「東洋と西洋」「本国と殖民地」「階級と階級」「個人と個人」の闘争をうみだしてしまう。しかし、「現代は、まさに歴史がひとつの世界構造から別の世界構造へ転

換しななければならない段階」にいたっており、「キャピタルイズム」の克服がその鍵となる。

こうして、「世界性の世界」を創造する課題が、資本主義批判と内在的に結びつけながら提示され、批判的に「転積」されていった。これは、「世界性の世界」「世界の多中心」を掲げる京都学派の「世界史の哲学」を、帝国主義的な中心（日本）―周辺（朝鮮）関係をのりこえるものとして批判的に受容し、転調させていくものである。それはまた、帝国主義を批判しつつ、「無的普遍」の論理によって日本の勢力圏を再定義し、中国・朝鮮・台湾を包摂しようとする京都学派の植民地主義をも、批判的に問いかえしていくものであった。

そして、このような徐寅植の言説戦略をささえていたのは、近代市民社会が行き詰まりをむかえており、そこには社会主義へ向かう変革の契機があるという時代認識であった。

「世界性の世界が創造される物質的条件だけは、現代社会の内部からすでに成熟した。その基本的な諸条件を定式化すれば、歴史の物質的土台を成す人間労働がすでに社会化の段階に到達したということである。

……個別労働への分化過程を踏んで、市民社会の最終段階にまで至った人間労働は、今再び媒介的全体労働

すなわち社会化された労働に回帰する歴史的転機に到達した」

これは、近代世界の矛盾を克服しようとする「近代の超克」論の時代認識を共有しつつ、社会主義的変革の可能性と結びつけて論じるものである。そのうえで、その変革を主導する実践的な担い手の問題を問いかけている。

「ひたすら問題は、この世界性の世界の理念を実現する上で主導的地位に立つ者がどこの国民でいかなる社会的成層であり、現在彼らがどれほどの主体的力量を保持しているのか、ということにある」

ここでは、「東亜協同体」論を唱える日本の左派勢力が自負するような、帝国主義を変革していく主導力を疑問に付き、「東亜協同体」論の実現可能性に疑いをさしむけている。これは、「東亜協同体」論がもつ世界性・普遍性の契機をあえて評価しつつ、それを日本が専有していくことを批判し、朝鮮／日本の狭間へと開いていくものと言える。

すなわち、日本が世界性・普遍性を専有し、その主導下で朝鮮社会の自立・発展が統御され、従属してしまうことを拒否し、自由な解放へ向かう交渉・抗争の知／実践の領野を確保しようとする試みなのである。それは、中国の抵抗に触発されつつ提示された「東亜協同体」論の世界性・普遍性の契機を、資本主義・帝国主義批判の手がかりとして

内在的にうけとめつつ、植民地朝鮮／帝国日本の狭間でその内実を問いなおすものであった。

五、むすび

以上のように、日中戦争期の「世界史の哲学」は同時代の植民地朝鮮において批判的に受容されており、植民地／帝国が連鎖・交錯する形で言説の場が成立していた。それは、「日本哲学」が他者に受容され、単にその外延がひろがったと言うべきものではない。ここでは、近代の危機をむかえているという時代認識のもとで、資本主義・帝国主義批判の一つの手がかりとして、植民地状況に抗するなかで「世界史の哲学」が受容されていた。それは、京都学派の左派の議論と連携しながら日本帝国主義を批判するものであると同時に、「世界史の哲学」自体が帝国日本の勢力圏を正当化していく植民地主義的な言説となりかねないことをも、批判の射程におさめるものであった。

こうして、「世界史の哲学」言説のもつ意味は、植民地朝鮮／帝国日本の狭間で、その臨界点において問いかえされていたのである。

参考文献

- 「植民地／近代の超克」研究会編（戸邊秀明解題、崔真碩訳）
《資料紹介》「日中戦争期・朝鮮知識人の東亜協同体論」
（東京外国語大学・海外事情研究所『Quadrante』六号、二〇〇四年三月）
- 崔真碩「朴致祐における暴力の予感」（『現代思想』三一巻三号、二〇〇三年三月）
- 趙寛子「植民地帝国日本と「東亜協同体」」（『朝鮮史研究会論文集』四一集、二〇〇三年一〇月）
- 趙寛子「徐寅植の歴史哲学」（『思想』九五七号、二〇〇四年一月）
- 洪宗郁「中日戦争期（一九三七―一九四二）朝鮮社会主義者の転向とその論理」（『韓国史論』四四集、ソウル大学、二〇〇〇年一二月）
- 洪宗郁「一九三〇年代における植民地朝鮮知識人の思想的模索——金明植の現実認識と「転向」を中心に」（『朝鮮史研究会論文集』四二集、二〇〇四年一〇月）
- 米谷匡史「戦時期日本の社会思想」（『思想』八八二号、一九七七年一二月）
- 米谷匡史「三木清の「世界史の哲学」」（『批評空間』Ⅱ期一九号、一九九八年一〇月）